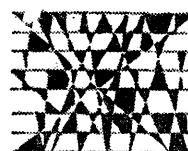


『ユートピアだより』

『香亭雅談』

『鯨の腹の中で』

菅原啓州



界で、為すに値する仕事に心楽しく携わる人びとが住む。自然は麗しく、人の肌はつややかで、目は輝き、人が身につけるものは質素だが、みごとな工芸品で、住居も町も、生命が通り、人間の生活によりそう……、そんな世界が目に見えるように描き出される。とりわけ主人公が遡るテムズ河の描写が美しい。

この本を、ユートピア論の読み方の常道である実現可能性の文脈で読むと、いかにも十九世紀的な、現実的根拠の薄弱なユートピア論ということにならうか。しかし、これは“論”ではなくて“ひとつ的世界”なのであって、作品の中を吹く薰風に身をゆだねて、細部を享受する類のものなのだ。そうすると、実現不可能であるということ自体が、今は、激しい照射力と浮揚力をもつことに気がつかがあるのである。

『ユートピアだより』は、詩人であり社会主義者であり、美術工芸家であり造本芸術家であったウィリアム・モリスが一八九一年に出版したユートピア小説。ある朝目醒めると、モリス自身らしい主人公は二十一世紀の理想郷にいる。資本制を脱し、機械文明の害毒も洗い落した世

『ユートピアだより』は、岩波文庫版（松村達雄訳）でも中央公論社版（世界の名著、五島茂、飯塚一郎訳）で

も、簡単に手に入れることができる。逆に、『香亭雅談』は、今のところ図書館で読むより他に手はない。（特に明治十九年に金港堂から発売された木版和装二冊の美しい初版を手に入れるのは不可能に近く、大正九年に芸苑叢書の一つとして再刊された和装一冊の活字体であれば、まだしも古書展などで手に入れることもできるが、こちらは極めて誤りが多い）

二百三十篇ほどの短い漢文の隨筆集で、近世の詩人・文人・書家・画家・音楽家・浮世絵師・巷の芸人などの逸話が、心のまま語り継がれた万華鏡といった趣きの本である。近世隨筆の伝統をまっすぐに受け継いで、それを簡潔平明な漢文にのせた好著である。山陽風の和臭の強い文章だから、漢文が得手でない、私のような戦後世代でも、辞引を片手に、充分精読できる。

文芸史家や伝記作家の本などに、たまに書名が出てくるくらいに、忘れ去られている本だが、これを敢えて挙げるのは、回顧趣味からでも、書誌学上伝記上の好資料だから、というわけでもない。今日のわれわれの社会

が、その出発点で、どのような精神のかたちを失うことによって、今このようにあるのかが、鮮明に見えてくるからである。近代の個性の毒に犯された眼には、埃をかぶった旧弊な遺物のようにしか見えなかつた人々が、一人一人生き生きと眼前するのはそれだけで楽しいが、こうした人たちが一処に生かされる風雅の空間は、言葉のもつとも貧しい意味で“具体的に存在した”のではなくて、風雅を解する眼と精神があつて初めて、そこに“存在”する無可有郷であることを教えられるのである。

著者の香亭中根淑は、モリス（一八三四—一八九六）とほぼ同時代で天保十（一八三九）年生まれ、維新の年を二十九歳で迎えた旧幕臣である。文武に秀で、幕軍の一員として鳥羽伏見で破れ、江戸に戻っては主戦を唱えて脱走、維新後には沼津兵学校の教官から陸軍省に出仕させられ（明治八年致仕）、明治十九年の文部省編輯官辞任をもつて、近代日本の進路からスラリと身をかわして、詩文の世界に遊ぶ。『香亭雅談』はその明治十九年の夏に上梓されたものである。初版から欄外に依田学海

の評（時には評に対する香亭の評まで）を付して、風趣のディアレクティーカを内蔵したユニークな本でもある。

なかなか手にしにくい本なので一篇を紹介してみた。『雅談』全体を凝縮したような部分は、前田愛氏が「荷風における江戸」（『鎖国世界の映像』所収）の中で、かなり長く引用されているので、それを見ていただくとして、ここでは香亭の好みが強く出ている一篇を紹介する。

勝田獻室成信居西谷家至貧著貧政

卷文

章警拔理致高邁余甚喜之今舉其一二曰一

切物從其有無自有所宜故米穀足則爲飯不足則爲粥甚不足則糉之以蘿蔔蹲鴨之屬乃他人一日之食余三日食之而有餘又曰衣服用草綿破則補焉大抵五年而新之若不能新之則就骨董市買故衣因想是必狂生換酒者今復伴斯癡呆者目蒙硯頭塵不知是何因緣也巖瓦石以錦綺繡緞人誰不笑之容我迂愚

之躬蘿衣藤帶而足矣又曰窓頭則一几一硯
一刀一墨筆管止于兩三莖紙簾止于數十葉
不足則以庭上芭蕉補之厨下則一壺一杯一
鑄一甕彼是兼用但酒茶具忌相兼兼則兩失
氣味儲磁器一二而可矣又曰床頭恒置一瓶
插時花數本則香氣自滿坐若微風入窓片英
落研則和墨磨之臨法書兩三行覺字有花
氣入盆則直葬腹中肝腸亦馨經數日花瓣落
盡更插新花無則猶留空枝譬諸落飾美人雖
無紅粉粧自有天然妙姿勝空瓶萬萬

そして、ここに付せられた依田学海の評は、

舟貧政序愛之
僕嘗讀及野霞

不圖今讀其一

『鯨の腹の中で』は、『カタロニア 資歌』『動物農場』

『一九八四年』などの作品で知られるジョージ・オーウ

エル（一九〇三～一九五〇）の一九四〇年の評論である。ヘンリー・ミラーの『北回帰線』の書評の形をとつたかなり長い評論だが、その成立の事情を越えて、現代の日本の状況を、これ以上みごとに照射しているものはない、というふうに読むことができる。

評論の臍にあたる部分を引用すると、

「……鯨の腹ともなれば大人でも充分入れる胎内である。その暗く、体の大きさにびったりのふわふわした場所に座りこみ、厚さ数ヤードという脂肪で現実とへだてられていれば、何が起ころうと完全に知らん顔でいられる。世界中の軍艦を沈めてしまはどの嵐もかすかなこだまとしか聞こえないし、鯨の動きそのものさえ、伝わってはこないだろう。海面の波のあいだでのたうつていようと、真暗な海中ふかく下降しようとなその違いもわかりはしまい。死んでこそいなくても、これこそ最終的、最高の無責任状態である。……ミラー自身はあきらかに鯨の腹の中にいる。……彼のばあい、鯨はまたま透明なのだ……」

（小野寺健訳）

オーウェルの原文は小気味よいほど平易で明晰な散文

だから、わかりきったことさえ難解に書く“知的”風習の根強い国に住むわれわれは、ペンギン版で簡単に手に入るので（Inside the Whale and Other Essays）、英語で読んだほうがいいかもしない。しかし、最近岩波文庫の一冊となった『オーウェル評論集』（小野寺健編訳）には、「象を撃つ」「絞首刑」などの珠玉の短篇小説とともに、秀逸な選択、平明な訳文で収められていて、簡単に手に入れることができる。

これを、『一九八四年』（これは早川文庫版で手に入る）という、失敗作だが、虚心に読めば身につまされるこのあまりに多い逆ユートピア小説と対照させつつ読むと、はじめに挙げた二書との隠れた相関が見えてくると、私には思えるのだが……。

（蛇足　どうしても漢文がいやだという向きには、吉川弘文館の続日本隨筆大成の第四巻に中根香亭の和文隨筆『醉迷餘録』『零碎雜筆』『塵塚』などが、収録されて、これらは簡単に手に入る。）（福音館書店編集部）